

エコチル調査のサポーター代表で、明治大学理工学部応用化学科教授の北野大先生にお話を伺いました。

— 先生は化学物質の専門家ですらっしゃいますが、身の回りの化学物質について、どう考えればよいのでしょうか。

私自身、化学物質の果たしている役割は否定していません。例えば、染料だって、昔ながらのインディゴばかりというわけにはいかないですし、合成繊維にしてもそうですよね。ただ、化学物質が果たしてきた役割はあると思う一方で、残念ながら人の健康や環境に影響を及ぼした物質があったことも事実です。化学物質の果たしている役割、有用性は認めつつ、それを上手く使おう、化学物質を使わないで済むところではできるだけ使わないでいこうというのが私のスタンスです。農業では除草剤は必要ですが、庭の雑草だったら手でも抜けますよね。洗剤も良い例ですよ。いっぱい入れたって良く落ちるものじゃないので、適量を使いましょうとかね。

— 化学物質は増えているのでしょうか。

医薬、農薬、食品添加物以外で、1t以上製造または輸入される化学物質に限っても、新たに年間300種類以上できています。これらは決められた試験法で事前審査を受けているのですが、それには限界があります。また10万種ともいわれる既存の化学物質についても、世界レベルで試験をやっていますが、まだまだ全て終わったわけではありません。

そこで重要なのが事後管理です。毒性試験など、事前にできる限りのことをやって、万が一新たな悪影響が出たら、禁止または制限していくということです。

— 化学物質を使っていない天然のものなら安全なのでしょうか？

食品添加物を例にしますと、僕はよく「食品添加物は全て嫌だ」などと言わないで欲しいと言ってるんです。例えば、人間が食用としてきたもので、その一部が添加物になっているものがあります。ナスの色素やミカンの香料などもそうですが、長年人間が食べてきて問題ないんだから、そういうものは心配ないでしょう。ただ、天然物であっても、食用でないものを使った色素などもあります。なので、天然物だから安全というわけではないんです。

また、昔は庭や畑で取れたものが食卓に上がったけど、今はそういうことはあまりない。世の中全体で、食の生産と消費の場が離れていってる。そういう社会の流れを考えると、保存料がいるんですよ。保存料などの添加物を一切使わないと、食中毒の方がはるかに大きなリスクになってしまいます。

— 読者の方や妊婦さんに特に気をつけてもらいたいところはあるか。

タバコを吸わないとか、お酒を飲まないっていうのは当たり前のことです。食に関して言うと、できるだけ家庭で食事を作ることが、化学物質のことだけではなく、子どもの成長にとっても良いと思うんですね。家で作れば、保存料も色素もいらなishよ。まさにお袋の味ですよ。お袋の味っていうのは、ずっと覚えてるんですよ。知ってますか？「昔は”お袋”の味、今は”袋”の味」っていうんですよ（笑）。だから今度は「”袋”の味から”お袋”の味へ」ってね。ただ、お勤めされて大変なお母さんもいらっしやるから、そこが難しいですよ。

— 神経質になりすぎずに、なるべく家庭での食事を心がけましょうということですね。子どもの育て方についてはいかがでしょうか。

「自助、共助、公助」という言葉という言葉がありますが、自助は自分1人の努力、公助は行政、そして共助というのは街です。隣組ですよ。共助、つまり社会全体で子どもを育てていく、そういう社会を作りたいですね。私のお袋は、自分の子もよその子も同じように可愛がった。それは、まさに一種の共助ですよ。そういう社会を作ると同時に、お子さんが産まれる前にも目を向けて、安心して赤ちゃんを産める社会になるように、環境面でも注意してあげたいですよ。

ー 最後に、先生がこの調査に期待することはなんですか。

この調査の成果というのは、日本人だけのためじゃないんですね。世界中の国に対して、大変大きな知見になると思います。非軍事的な国際貢献ですね。それは自分の子どもや孫のためでもあるし、日本国民全体、そして世界のためでもある。憲法の前文みたいな感じですけど、そう思うんですよ（笑）。そういう意義をお母さん方に理解していただきたいですね。「人に迷惑をかけない」というのは生きていく上でとても大切なことですが、そこからもう一歩積極的になって、「人様のお役に立つ」ことができれば、それは生き甲斐の一つだろうと思うんです。

さっきも申し上げたように、うちのお袋は、自分の子どもよその子ども、全く同等に扱ったんですよ。お袋は機械科に行くのが全てだっていうふうに考えてたんですね。兄が機械科に行って、弟も機械科に行って、近所の子どもも、みんな機械科に行かせちゃった。嘘みたいな話なんですけど、ほんとなんです。自分の子どもに良いと思うことは、よその子どもにもほんとにやっちゃったんですよ。僕は機械は苦手なんで、化学に逃げただけ（笑）。そういうふうにして、自分の子を可愛いがると同時に、よその子ども同じように可愛がった。もちろん、きついことも言う。そうやって、よその子どもみな同等にしたって言うのは、僕はすごいと思うんです。だから、お母さん方、そして、これからお母さんになる方に言いたいのは、もちろん自分のお子さん可愛いですよ。と同時に、他の人たちの子ども可愛いんだと。エコチル調査の社会的な意義もそういうことですよ。

ー 確かにエコチル調査は、参加いただいたお母さんの子どもさんに直接利益があるわけではないんです。その子どもさんの次の世代のための研究なんです。

そうですね。まさに孫の世代ですよ。孫って、可愛いんですよ（笑）。子どもや孫が可愛いからこそ、自分ができることをやっていくと。社会に生きてるってことは、皆さんのおかげなんですよ。「お互い様」と「おかげ様」なんですよ。その2つの気持ちで、可愛い子どもたちと孫たちのために、何かしていこうじゃないかと。それがこの世の中に生かされてる、生きている意義だと思うんですよ。生きていく意義というのは、仕事を通して社会に貢献したいというのもあるし、仕事以外でも、

何らかの形でお役に立ちたいっていうのもある。その気持ちがあれば、自分の子も、他の人の子も、さらに孫のことまで考えられる。あとは、参加することで、お母さん自身も化学物質や環境に対して、より関心を持つようになるんじゃないかっていう、そういう効果も期待しています。



明治大学工学部教授／工学博士

北野 大（きたのまさる）

■プロフィール

明治大学教授。専門は環境化学。環境省の中央環境審議会委員や経済産業省の化学物質審議会委員を勤める。

「安全学入門」、「人間・環境・安全」など、著書も多数。